

晋の景公が重い病気にかかり、名医が呼ばれて診察することになりました。名医が到着する前の晩、晋の景公は夢を見ました。夢の中で、景公は自分の体内の病が二人の小人となって、自分の枕もとで話しているのを聞きました。一人の小人が言いました：「明日には名医が来るそうぞ。見つかったらどうしよう!」すると、別の小人が言いました：「我々は今、横隔膜の上、心臓の下に入っているんだから、名医だってどうすることも出来ないさ。心配しなくてもいいんだよ!」

あくる日、名医が到着して、景公を診察してから言いました。「王様の病気は、横隔膜の上、心臓の下に入ってしまったので、どんな薬もそこまでは届きません。」と言いました。はたして景公は、間もなく亡くなりました。

古くから、中国医学では心臓先端の脂肪の部分「膏」と言い、心臓と隔膜の間を「肓」と言って、病がここまで進むと、どんな薬も効き目がないと言われています。



満柏氏画

すのを聞いて、すっかり「こうもう」で正しいと思っていました。

中国語を始めるようになって、「膏肓」を、中国語で何と読むかと調べた時、「膏はgao 肓はmang=膏肓はgao-mangか」と見当をつけて探しましたが見つかりません。それで、改めて日本語の辞書で、「こうもう」と引くと、「こうこうの誤り。『肓』を『盲』と読み間違えたことによる俗用」と出ていました。

驚いて、字をよく見ると、膏肓の「肓」は「亡」の下が月でした。これを「亡」の下を「目」と読んで、勝手に「もう」と読んだのですが、辞書に態々載せているということは、誤用している人がかなり多いのだと納得したものでした。

中国医学の始まりは、文献からも紀元前2000年にまでさかのぼることができるそうで、医学用語も、「五臓六腑」とか「臍下丹田」とか、其のまま四字成語として使われており、人々の生活の中に溶け込んでいます。

日本でも薬膳や気功に興味のある方が増え、それにつれて用語や思想が少しずつ一般にも知られるようになって来ましたが、流石、中国は歴史が違います。一般の人々にも、「おばあさんの知恵」としてほとんど「常識」となっているようです。

北京にいた時、同年配の人々との集まりで、「ちょっと歩きすぎて足が痛い、疲れた」と話すと直ぐに、「どこどこのツボを押さえると良い」とか、「なにをどのように料理して食べると疲れが取れる」とか、あちこちからアドバイスが飛んできました。

最近になって、薬膳のお話を聞く機会があり、食材ごとに持っている機能が違い、薬膳は、症状に合わせて、それらを組み合わせて料理するのだと知りました。その中に北京で貰ったアドバイスを裏付けるお話があり、民間の言い伝えも、中国医学の理にかなっているのだと感心しました。

言葉の意味：「膏」は心臓先端の脂肪部分、「肓」は心臓と隔膜の間。病気が、薬が効かない程重くなった状態のことを言う。

使い方：病気が、膏肓に入ったので、病人はもう生還(快復)の見込みが無くなった。

日本語でもそのまま使い、読み方は「病膏肓に入る(やまい、こうこうにいる)」ですが、日本では、病状にはあまり使わず、趣味などが高じて、周りの人達が呆れるほどになった時、「あれはもう、病膏肓に入るだね。今更止めることは出来ないだろう」などと使いますね。

そして、そんな時、「病こうもうに入る」と言われることが間々あります。実は、私もごく若い時に、この字に出会い、勝手に「こうもう」と読んでいました。読むばかりでなく、周りの方が何人か、「病こうもうに入る」と話